

第153回 香川生物学会例会 研究発表要旨

香川県の淡水棲カメ類の分布に関する研究

上西元気・松本一範（香川大・教育）

香川県で4月から11月にかけて淡水棲カメ類の分布を調査した。4地点（塩江の池、御厩池、本津川、摺鉢谷川）でカニカゴのトラップにより、クサガメ（91個体）、ミシシippアカミミガメ（87個体）、スッポン（3個体）が捕獲された。御厩池を除く3地点では、増加が危惧されている外来種のミシシippアカミミガメよりもクサガメが多く捕獲されたことから、香川県ではクサガメの減少は顕著ではないことが示唆された。捕獲されたカメの性比は、本津川のクサガメを除いて、偏ってはいなかった。クサガメに関しては、本津川では老齢個体よりも若い個体が多く捕獲されたが、塩江の池と摺鉢谷川では若い個体よりも老齢個体が多く捕獲された。従って、今後、クサガメは本津川以外の調査地点では、減少する可能性もあると考えられる。ミシシippアカミミガメに関しては、摺鉢谷川では若い個体よりも老齢個体が多く捕獲された一方、御厩池と本津川では老齢個体よりも若い個体が多く捕獲された。従って、今後、ミシシippアカミミガメの減少は摺鉢谷川以外では望めそうにもないことが示唆された。

高松市内におけるメダカの生息環境に関する研究

岡林裕泰・松本一範（香川大・教育）

メダカはかつて日本各地に生息していたが、圃場整備による環境の変化や外来生物による影響、水質の悪化などが原因でその数が減少し、生息場所も限られてきている。メダカの生息には流速や植生が影響することが報告されているが、香川県ではメダカの生息環境に関する調査はあまり行われていない。本研究では香川県高松市の水域において、ミナ

ミメダカの生息に適した環境要因を明らかにすることを試みた。高松市内17地点の水域において、ミナミメダカの生息が確認された。本種の生息地とその上流・下流の非生息地の3ヶ所で流速・水深・水質・水温・植生を比較したところ、ミナミメダカは穏やかな流速と浅い水深を持つ水域に主に分布していることが明らかになった。また、植物の存在や水質も本種の生息に影響する可能性があることも示唆された。

コウモリの死体から採集されたクモバエ

川口 敏（香川県さぬき市在住）

笹井剛博（国際双翅類研究所多摩分室）

日本におけるクモバエ研究の現状と課題について報告した。一般に寄生バエは生きた動物から採集されるが、クモバエは事故死したコウモリからも採集される。現在、日本産コウモリは36種知られているが、クモバエは11種しか記録されていない。もしコウモリの種ごとに固有のクモバエが存在するとすれば、あと25種程度の日本未記録種あるいは新種のクモバエが存在すると予想される。ユビナガコウモリから4種のクモバエ（ケブカクモバエ、ヘラズネクモバエ、ヒメヘラズネクモバエ、コヘラズネクモバエ）が記録されているが、ユビナガコウモリの固有種はケブカクモバエで、その他の3種は他のコウモリから移ったものと考えられている。ユビナガコウモリ1個体に2種のクモバエが寄生していることがある。その場合、1.3倍則により大型種と小型種の組み合わせになり、大型種と大型種あるいは小型種と小型種の組み合わせは生じないと予想される。今回、ユビナガコウモリ1個体（死体）から、ケブカクモバエ（大型種）とヒメヘラズネクモバエ（小型種）が採集された。